

①ある男の告白

——非通知の着信が鳴っている。

その日も私は、何時もの様に週刊雑誌の締め切りに追われながら、慌ただしく編集業務をこなしていた。

デスクの上に置いたスマートフォンの着信が鳴ったのは十五時を少し回った時だった。スマホを手に取り着信画面を確認すると、普段から非通知の着信には出ない事になっていた私はそのまま無視をして仕事を続けた。

十分程後、部下と編集の打ち合わせをしていた時、再び非通知の着信が鳴ったのだ。私はそのまま着信には無視を続け、部下との話しを続けた。

「編集長？ 電話鳴ってますが出なくて良いんですか？」

「ああこれか。別に良いんだよ。ほっといて、非通知で掛けてきているからどうせイタズラか何かだろう？」

締め切り間際の編集に追われているこの忙しい時に、イタズラ電話なんかに構っている場合ではない。

私はそう思いながらバタバタと忙しく仕事をこなしていったのである。

私、山根タカシは、某出版社で雑誌の編集長をしている今年、五十歳になる中年男である。

妻の由美とは社内恋愛で結ばれ、そのままの流れで結婚に至った。

十歳年下の妻は若い頃、黒木瞳似の美人と社内ですれ違われる位、男性社員の間でも憧れの存在の女であった。

その彼女を私が射止める事が出来たのは、同じ編集チームの先輩、後輩の立場で仕事を指導し、他の男性社員よりも仕事を通し彼女と長い時間を共有する事が出来たからだだった。

そんな妻も早いもので今年で四十歳になる。

私達夫婦も今年で結婚十五年目を迎える事となった。

妻に惚れ込んで一緒になった私。

しかし流石に十五年も一緒に暮らしているとすっかり刺激も無くなり、此処のどこ夜の方の回数もめつきりと減ってしまっている。

マンネリ気味で刺激の無い暮らしでは有るが、それでもそんな暮らしに特別不満を感じた事も無く、平穏で穏やかな生活を送れる事に私は満足していた。

あの日あの一本の電話が鳴るまでは……

——何とかその日の業務にメドを付け、会社を後にした時には時刻は既に十九時を回っていた時だった。

九月も半ばを過ぎようとしているのに、まだまだ外は暑く、蒸し暑い外気が一気に襲ってくる。ワイシャツの下から吹き出てくる汗が、あつという間に体中をベトベトに濡らしてしまう。

私は少しでも早くシャワーを浴びたい衝動に駆られながら、地下鉄に向かって帰宅を急ぎながら、青山通りを歩いている時だった。

内ポケットに入れたスマートフォンが振動したので取り出してディスプレイを確認すると又しても非通知の着信である。

イタズラにしては、いささかしつこすぎる。

何故かその時私は、少しばかり胸騒ぎを覚えてしまい、電話に出てみる事にしたのだった。

「もしもし？」

「山根さんですか」

「はいそうですか？ どなた様でしょうか？」

「留守電の声、聴いて頂けました？」

「声？ いえ、聴いてないですがあの、失礼ですがどちら様でしょうか？」

おのずと恐縮した声で尋ねていた。

自分とした事が忙しさの余り、留守電の確認をしていなかった事にその時気付き、てっきり仕事関係の大切な伝言が入っていたのだと思い込み、焦ってしまったからである。

「そうですか。まだお聴きではなかったですかあ。それではまた十分程後に掛け直します」
そう言い終えると男は、一方的に電話を切ってしまった。

何なんだ失礼な奴だな。

私はそう思いながら急いで留守電のメッセージを確認してみる事にした。

メッセージは二件録音されていた。

一件目。

「ああーッ、あッああーッ、いいーッあッ！」

街の雑音の中では、はっきり聴き取れないが十秒程で切れてしまった録音には、悶え喘ぐ女の声が残されていた。

何なんだ一体？

何かいかわしいアダルトサイトの宣伝か何か？

この時状況が全く把握出来ないでいた私は、頭の中が混乱し始めていたのだった。

とりあえずもう少し静かな場所で聴いてみようと思い、私は本通りを外れ人通りの少ないビルの谷間に場所を移動し、二件目のメッセージを再生する事にしてみた。

「あつあつ、あんあんつ、ああー、いいつ、カズヤあ……ああーいいーッ。す、好きー……あッあッ」

今度は、二十秒程の間、喘ぎ狂う女の声がはつきりと聴きとれた。

状況が把握出来ないにも関わらず、その声を聴いた私の股間は女の喘ぐ声に刺激を受けてしまい、街中だと言うのに私のペニス勃起を始めてしまっていたのだ。

そして再び携帯が鳴った。

先程と同じ非通知。さっきの男からに違いない。

私は慌ててボタンを押すと、急いで携帯を耳に押し当てた。

「もしもし」

「聴いて頂けましたか？」

一呼吸置いて、丁寧で落ち着きはらった口調の男の声が返ってくる。

「ああ聴いた、女の声が入っていた。一体何なんだ？　そもそも君は誰だ？　何かエッチな物でも売り付けようと言うのかい？　それともただのイタズラ電話か？」

この男は何者なんだ？　目的は？

一つだけはっきりと言える事は、男が私の名前も携帯の番号も知っているという事だ。

だから今は、下手に強気な態度は取れない。

なるべく相手を刺激しない様に、しかし決して相手に付け込まれない様、堂々とした態度を示しながら、冷静沈着を装わなければならないと悟ったのだった。

「声をお聴きになられても判りませんか？　あなたの奥さんの声ですよ」

「えっ？」

男の答えに度肝を抜かれてしまった私は、返す言葉を見失ってしまう程、頭の中が真っ白になっていた。

「女房？」

「あの声は先程、私と由美さんが交わった時の声ですよ」

一瞬にして私の頭の中に、見知らぬ男に組敷かれ悶えながら喘ぐ妻の姿が浮かんでくる。

それと同時に心の奥底から、強烈な嫉妬心と怒りの様な感情が込み上がってくるのを感じていた。

「もしもし聞こえてますか？」

「ど、どう言う事だ……お前は誰だ？」

「私はあなたの奥さんとお付き合いをさせて頂いている男です。そして山根さん、あなたは私と奥さんの関係を必ずお許しになると思っています」

「な……何が目的でこんな事をする？ それにあの声が女房だと言う証拠が何処に有る……？」

私は昂る感情と動揺する心を必死で押さえ込みながら、震える声で男を問いただしていた。男に向かってそうは言ってはみたもののさつき聴いた女の声は、おそらく妻で有ろう事は確信していたのだった。

「目的ですか。それはあなたの願望を叶える為に、私が山根さんにお力をお貸しする事ですよ」
「力を貸すだと？」

「由美さんから聞いてます。山根さんが3Pをしてみたいとおっしゃっている事。それに由美さんがあなた以外の男に抱かれている所を見てみたいとおっしゃった事」

「:d」

「山根さん、あなた寝取られ願望をお持ちなんでしょう？ その願望を私が叶えてあげようと思っているんですよ」

自信有り気に呟く男の言葉。

それは、まるで私の全てを見透かしている様な口振りだ。確かに二ヶ月程前、一度だけ妻に3Pの話をしてみた事が有る。

しかしその時は妻に凄く剣幕で怒られてしまい、その後一切その話題には触れない様にしていたのだ。

そんな妻が不倫をしていたとは。

妻の裏切りと浮気を見抜けなかった自分自身のアホさ加減に腹立たしさを覚えてしまう。

今妻はどういう気持ちでいるのかが凄く気になってしまった私は、思わず強い口調で男を問い正してしまった。

「ゆ、由美とは一体何時から付き合っているんだ？」　そもそもツ！　由美はお前の事をどう思っているんだツ？」

「山根さん、そう興奮されしないで。そんなだと、こちらの提案もお話しも出来ないし、あなたのお力にもなれませんよ。なんならこのまま電話切ってしまいませんか？」

思わず怒鳴ってしまった事で男の気分を損ね、電話をこのまま切られてしまったら真相も妻の気持ちも聞き出せなくなってしまう状況にある事に改めて気付かされ、何とか冷静さを取り戻したのだった。

「声を荒げてしまつてすまなかつた。君の話聞かせて貰えるかな？」

「分かりました。そうおっしゃつて頂けるなら話しを続けさせて頂きます。先ず奥さんとの関係ですが、いやいやお付き合いを始めたのは三ヶ月程前になります。そして由美さんは今、私に惚れ始めています。しかし、私の口から言うのも変なのですが、由美さんが山根さんの事を愛している事だけは確信しています」

女房が男に惚れ初めている？

私はその言葉にショックを受けたと同時に、不安と焦りの気持ちが湧き出てきたのだった。

「只あなたから3Pの話を持ち出された時はかなり驚いたと言っていました。その頃は私と付き合い始めたばかりで、私に夢中になりだした頃ですからね。他の男とセックスするなんて絶対に嫌だとも言っていましたよ。だからあなたからの3Pの提案を強く拒否したのだと思います」
やはりそうだったのか。

だからその後、何度求めてもイヤッと拒否され続けたのだ。

その拒否の理由を私は3Pの話で妻から信頼を無くしてしまったからだと言いつつ勝手に思い込んでいたのだった。

自分で墓穴を掘ってしまった形だ。

「でも今は私が3Pの話をするとう興味を示す様になっています。否定する様な事は決して無いですよ。元々興味は有ったみたいですね」

「君も由美に惚れているのかね？」

私は意気消沈の中で力なく尋ねていた。

「勿論好きですよ、綺麗な女性ですからね。少し黒木瞳に似ていますよね。物腰も柔らかいし、清楚で上品なのにセックスの時には大いに乱れてくれますから。そのギャップが何とも言えないです。まさに私が探し求めていた理想の女性ですよ」

私は、男の言葉に本気で不安を感じてしまい、この男に妻を盗られてしまうのではと、本気で心配をしだしていた。

これは修羅場になっても男と決着を着けなければならぬと思いつめていたのだ。

「でもね山根さん、決まってもご心配されなくても大丈夫ですよ。私は決して惚れ込まない様になっていますから。あくまでもセフレとしての感情しか持たない様になっていますので」

「それはいったいどうして？」

「何故なら私の願望は不倫相手を淫乱に調教していく事だからです」

「はあ？」

思いも寄らない理由を語る男に思わず間の抜けた返事をしてしまう。しかし男は構わず話を進めていく。

「そしてその変化していく過程を本人には内緒でご主人と一緒に共有して楽しむ事が私の一番の楽しみだからです。由美さんから山根さんの願望をお聞きした時、私の計画のパートナーにぴったりの人だと思っただけです。寝取られ願望を持った男性に出逢える事なんてめったに無い事ですからね。だからこうしてあなたにお電話しているのですよ」

私は返事ができなかつた。一呼吸おいてから言葉を探す。

「私がキレて君を訴えるかも知れないとは考えなかつたのかね？」

「山根さん、悪いですがそれは無理だと思います。由美さんに教えている私の名前は偽名です。この携帯も裏の世界で流通している物を手に入れたものですから、私が再び奥さんとお会いしているところを捕まえない限り、この電話を切った瞬間からあなたが私にたどり着く事は不可能だと思います」

「そうなのか？ 君の目的は本当にそれだけなのか？」

「そうですねと言うか、私はこの計画を実行する為に色んな人妻さんと関係を持つているんです。しかし、滅多に山根さんみたいな願望を持った人とはなかなか出逢えないのが正直なところですよ」

「やつと男の目的がわかったような気がした。」

「男と妻に対して、嫉妬が無くなった訳ではないが、妻が惚れたとしても男の方に本気になる意思が無いと聞かされた事が私を少しだけ安心させてくれたのだった。」

「それに私自身に寝取られ願望が有る事も事実だ。」

「それが証拠に、今の私は男の誘い話を真剣に聞いているし、心のどこかで何かを期待している自分が居ることに気がついていた。」

「だから山根さんがこの電話のことを今夜、由美さんに話し、彼女を問い詰めたりすれば、その時点でこのお話は全て終わりになります」

「それで？ 君は、どうしようと言うんだい？」

「はい山根さん。由美さんの本気で乱れる姿を観てみませんか？ 日毎、淫乱に変化していく由美さんを見てみたいと思いませんか？ 勿論、由美さんにはこのことは内緒です。承諾して頂けるならあなたと私と由美さんで3Pが出来る様に仕向けてみせますよ。それが山根さんの願望でしたよね」

「変化の過程って、私はどうやって確認するんだい？ 直ぐに3Pが出来る訳では無いだろう？」

「勿論、今直ぐは無理です。暫く時間はかかると思いますが。でもその間、確認する方法は幾らでも有りますよ。例えば、私と奥さんの行為を隠し撮りするとか」

「まさかとは思いますが、今までに由美との行為をビデオに撮ってネットとかAV業界に売ったなんてバカな事は絶対に無いだろうな？」

「それは絶対に有りませんのでご心配いりません。お約束しますので。私の目的はそんな事ではないですから。そんな事をしたら私の計画自体が台無しになってしまいます」

「……」

「……因みに過去一組のご夫婦の方と、今回と同じ様な計画を実行し、奥さんの調教に成功して旦那さん共々お付き合いした経験が有ります。去年、奥さんがご病気で亡くなられたので関係は終わりましたけどね、とまあ以上が私からの提案です。今夜一晩じっくりと考えてみてください。提案に乗って頂けるなら何時でも山根さんとお会い致しますので。無理な場合は私も由美さんとお別れするのは非常に残念ですが関係を終わりにします」

「終わってもいいのか」

「はい私はそのつもりです。明日、またお電話しますので今日はこれで失礼します。因みに、今日のセックスの時、由美さんのお尻の右側にキスマークをつけておいたので良かったら確認してみてください。それではまた連絡します」

不倫相手の男から電話が切れた後、私は暫くの間、ボーっとその場に立ちすくんでしまっていた。腕時計の針は十九時半を差していた。三十分近くも話をしていた事に驚く。そのまま家に帰る気にはとてもなれず、私はいつの間にか、通りすがりの居酒屋の暖簾をくぐっていたのだった。

カウンタ―席に腰を降ろし、とりあえずビールを注文した。運ばれて来た中ジョッキを一気に喉の奥に流し込む。喉が乾いていたせいもあり、あつという間にジョッキを空けてしまった。

冷えたビールが胃袋に染み渡る。二杯目をお代わりし、一息ついた所でやっと気持ちが悪く落ちてきた。

顔がやけに熱い。

頬に手を当てみると顔が火照っている。

タバコに火を点けふうつと一息吐きながら、男が話した内容とこの三ヶ月の妻の行動を擦り合わせながら記憶を辿ってみる事にした。

付き合い始めたのが三ヶ月前？

私が妻に3Pの話をしたのが二ヶ月前の事だからその一ヶ月前か？

そう言えば急に妻のセックスが消極的になってきた時期と重なる。

今までも妻の方から誘ってくる事などは殆ど無かったが、私が求めると体調が優れない時以外はいつも積極的に応えてくれていた。

それがある日を境に突然、淡泊で消極的なセックスに変わったように思えた。今思えば彼の為に快感を抑えていたのかも知れない。

ひと月の間ずっとそんな状態が続いていた。

その事がきっかけで私は、妻も刺激がないから燃えないのだろうと自分なりに解釈して、思いついて私の願望である3Pプレイの話をしたのである。

そしてその後の展開は先程、記した通りの流れで何度も拒否され、今日に至っているのだ。

男が話した内容と完全につじつまが合う。

男とは一体、何処で知り合ったんだろう？

妻は専業主婦なのでそんなに出会いの場が有るとは思えないが妻が通っている陶芸教室のメンバーか？

それも考えにくい。

男とは何時会っているんだ。もう何回位寝たのか。俺に対して妻は罪悪感はないのだろうか？
等々色々な思いが頭の中を駆け巡りだし、このままではこの場で酔い潰れてしまいそうな気持ちになってしまった私は、勘定を済ませ店を出た。

そうして仕方なく家路に着く事にしたのだが、このままでは妻の顔をまともに見ることに自信が全く出なかった。

とりあえず妻に電話を掛けてみる事にする。

『ブルルルル』

携帯に掛けてみたが出ない。

自宅の電話に掛けてみる。

「はい、山根でございます」

いつもの品のある妻の声が聴こえてきた。

「あゝもしもしママ俺だけど」

「あら、パパ。どうしたの？」

いつもと少しも変わらない妻の明るい声が返ってきた。

「あ、うん。携帯に電話したんだけど出なかったからこつちに掛けた」

「あら、そうなの、ごめんなさい。お夕飯の支度をしてたからどうしたの？ 今日も残業？
遅くなるの？」

「いや、今日はもう終わった。今駅に着いたとこだ」

「あら、そう？ 週末なのに珍しく早く終われたのね」

「あ、あー。思った以上に仕事が捗ってねえーつと、何か買って帰る物とか有るかな？」

私は馬鹿みたいに妻に氣を使い、自らお買いを買って出てしまっていた。浮氣されているのは私の方だと言うのに

「あら、珍しい良いの？じゃあ頼んじやおうかしらえつとじゃあねえ駅の中に有る、あのケ—キ屋さんのイチゴのムースとモンブランケ—キ頼んでもいいかしら？」

「ああ—分かったじゃあ買って帰るから」

「は—いい今日は。パパの好きなビーフシチューよ。氣を付けてね」

「分かった」

凄く機嫌が良かった。

男に抱かれた事が余程嬉しかったのだろうか？

一体、女という生き物はどんな精神構造をしているのだろうか？

今聞いた妻の声と、さっきの妻の声が、頭の中で交互に鳴り響いている。